

彩の国さいたま芸術劇場×クリストファー・グリーン(英国)

『THE HOME オンライン版』第4回報告書

〈振り返り〉

太下義之

計4回のレポートの最終回に、あらためて本報告の目的を再確認しておきたい。それは、「オブザーバーとして参加したことでの気づきや課題について、プロジェクトの枠を越えて共有し、将来的な国際共同制作の知見として活用する」となるだろう。

このように考えると、最終回のレポートはももとの指定の「公演の反響」という内容ではなく、本プロジェクト固有の課題ではなく、他のプロジェクトにも汎用できるポイントに関して、過去のレポートの一部再掲も含めて、全体の総括と位置づけた「本プロジェクトに関する気づきや課題」を取りまとめることが相応しいと考える。

また、「本プロジェクトに関する気づきや課題」だけではなく、せつかくの機会であるので、「プロセス・オブザープ自体に関する気づきや課題」というメタ・レベルの総括も行うことが有益であると考え。

1. 本プロジェクトに関する気づきや課題

「THE HOME オンライン版《バーチャル施設見学》」に関する気づきや課題として、以下の7点を挙げるができる。

(1) コロナ禍転じて福となったリモート会議

今般、新型コロナウイルス感染症の全世界的な拡大防止の必要性を背景として、ZoomやWebex等のリモート会議が急速に世界中に普及した。そのことにより、本プロジェクトを含む国際共同制作の現場においても、複数の国・地域にまたがる複数のステークホルダーによる、資料を共有しながらの複数回のミーティングを比較的容易に設定できるようになった。これはコロナ禍が生み出した数少ないプラスの社会的効果の一つである。今後の国際共同制作においては、こうしたリモート会議による進行がデファクト・スタンダードになるであろうし、そのことを前提に国際共同制作の在り方を検討する必要がある。

(2) 通訳の絶対的な重要性

国際共同制作においては、もともと通訳の役割が極めて重要であったのであろうが、リモートによるコミュニケーションが普及したことで、さらにその重要性は決定的になったと感じた。本プロジェクトにおいては、ほとんどの会議で同じ方が通訳を担当した。そのことにより、各人の発言の背景等を補うような通訳を実施していただけたことで、日英間でのコミュニケーションは格段に良好なものになったと考える。すなわち、当該分野の芸術に明るく、水準の高い通訳を、制作チームの一員として位置づけて、基本的に全ての会議に参加してもらうという体制構築が望ましい。

(3) カジュアルなりリモートゆえの懸念

このように簡単にコミュニケーションの頻度を高めることができるようになったため、国際共同制作が相当にカジュアルなものになった。もちろん、そのこと自体は素晴らしいことである。ただし、以前の国際共同制作においては海外出張が必須であったため、相手の国・地域の文化や芸術性等に関する情報収集やインプットを事前にそれなりに入念に行っていた。これに対して、リモートの場合はあまりに簡単に打ち合わせを設定できるため、これらの準備作業が疎かになりがちという懸念も指摘できる。カジュアルなりリモートゆえの油断、に注意が必要である。

(4) 「仕事」の進め方がそもそも異なる

国際共同制作においては、「相手も同じ人間なんだし、まして同じ分野(演劇)の仕事をしているのだから、仕事の進め方も概ね同じようなものだろう」などと思いついてはいけな。同じ分野のプロフェッショナル同士の仕事の進め方においても、文化的な作法の差異がある。たとえば本プロジェクトで、オンライン版の映像作品の制作にあたり、英国の演出家はアーティストックな目標を設定するだけで、あとは映像作家にお任せとのことであった。彼は脚本も執筆しないのである。しかし、日本では脚本を細かに書き込んで委託しないと映像制作ができない。このように、プロ同士の仕事の進め方にもかなりの相違があったと感じた。

(5) 「締切」に対する時間感覚の差異

本プロジェクトの最終局面で、日英双方のコンテンツに翻訳を付けることとなったが、これがタイムスケジュール通りに進まなかった。その背景には、日本と国外では「締切」の概念の差異があったと推測される。一般に日本人は海外からは“punctual”、すなわち時間に几帳面と思われるようである。たとえば、時間を順守しようとしてスピードを出し過ぎた鉄道事故や、新幹線の過密なダイヤなどを見ると、たしかにそういう面があるのかもしれないとも思う。国際共同制作においては、海外の人は日本人とは異なる(もっと緩い)時間感覚を持っているという前提で仕事を進めた方がよい。

(6) 「質問力」の涵養の必要性

詩人にして劇作家の寺山修司はかつて「私は偉大な質問になりたい」と語っていた。国際共同制作においても、実は「質問」はとても重要である。相手の仕事の進め方に疑問がある場合には、疑問(WHY)を明確に伝達する必要がある。この際に、日本側の考えをロジカルに説明することにより、より望む回答を得られることになるであろう。すなわち、「あなたの意見のどの部分に、私は疑問を感じているのか」を明確にする、「質問力」が制作現場では問われると考える。日本国内にて日本人同士で制作している場合とは異なり、お互いの多様性を尊重しながらも、文化的差異については明確にしておく必要がある。

(7) 作品における文化的多様性の提示

国際共同制作を通じて、それに関わったアーティストやスタッフは日本の相手国・地域との生活習慣や仕事に対する向き合い方等の違いを体験することができるであろう。もっとも、こうした貴重な体験をごく一部の関係者だけに限定しておくのはもったいない。本来であれば、作品を通じて、そのような文化的な多様性を観客も追体験できることが理想的であると言える。本プロジェクトにおいても、「老い」に対する日英の向き合い方の違いも明らかになったように思う。そうした学びを通じて、高齢者介護におけるケアとコントロールについて観客自身が考えるようになると素晴らしい。

2. プロセス・オブザープ自体に関する気づきや課題

本項においては、個々のプロジェクトに関する内容ではなく、「プロセス・オブザープ自体に関する気づきや課題」というメタ・レベルの総括を行う。評者からの提案は下記の2点である。

(1) 報告書の回数および文字数について

プロセスオブザープとしての依頼内容の中心は、4本の報告書である。そして、そのタイミングとしては、「企画発足の過程」「稽古」「成果発表」「公演の反響」の4つの段階があらかじめ提示されていた。しかし実際に業務に取り掛かってみると、この4つの段階では区切りが悪く、また、回数も多いと感じた。

まず最初の「企画発足の過程」であるが、既に国際交流基金に助成の申

請をしている時点で、実は企画は発足していると考えられる。したがって、オブザーバーが参加できるのは、具体的な打ち合わせの段階からとなる。

また、次の「稽古」(本プロジェクトにおいては、映像の撮影・収録およびゲームアプリの制作が相当)の段階であるが、この段階においても、企画内容に関するさまざまな打ち合わせが実施され、その結果が実際の制作(稽古)に反映されていくという流れとなっている。

さらに、「公演の反響」段階については、特に本プロジェクトがそもそもバーチャルな作品であるため、反響の把握が容易ではないという実態があった。そこで本レポートもこのような内容となっている。

こうした状況を勘案すると、報告書の作成段階は、「制作の過程」と「作品の成果」の2つの段階に絞った方がよいと考える。

また、文字数に関しては、「報告書1本につき4,000字以上6,000字以内」と指定されていた。ただし、実際に執筆しようとパソコンに向かってみると、テーマが限定的であるため、「4,000字以上」のテキストを書くのはかなり困難なことだと感じた。報告書1本あたりの文字数は、感覚的に「2,000字～3,000字程度」が相応しいのではないかと思う。

(2) 他の対象作品の鑑賞およびオブザーバーとの意見交換

今般の国際共同制作のオブザープの対象は、私の担当した「THE HOME オンライン版《バーチャル施設見学》」を含めて計8本の作品となっている。それらの作品のうち、静岡県舞台芸術センター(SPAC)とフランス国立演劇センタージュヌヴィリエ劇場の共同制作による「桜の園」については、たまたま私がSPACの評議員であるという立場で既に観劇していた。しかし、それ以外の6本の作品についてはほとんど情報すらないのが現状である。

こうした状況のまま、2月にシンポジウム(座談会)を行っても、個々の作品の枠を越えた国際共同制作の気づきや課題に関して議論が深まるとは思えない。

やはり、自分がオブザープを担当した国際共同制作の作品だけでなく、他の対象作品についても、シンポジウムに先だってあらかじめ鑑賞しておくことが必要であると考え。そのうえで、個々の担当者のレポートを読み、作品制作の背景の苦労や課題等を把握しておくことが望ましい。こうした事前の準備と予習がないと、シンポジウムは通り一遍のものになってしまう懸念がある。さらに言えば、この一連のプロジェクトが始まる当初において、オブザーバーによる顔合わせがあった方が良かったと思う。自分以外にどのような人物がオブザーバーに選任されているのかを知っておけば、後に個々のレポートを読む際に、どのようなバックグラウンドからそれらが執筆されたのかを理解しやすくなると期待されるためである。

そして、上述した最初の「制作の過程」段階のレポートが出そろった時点で、再度、オブザーバーによる(非公開の)懇談会のようなものを開催することが望ましいと思う。この段階でお互いの気づき等を意見交換しておくことにより、その後の各自のオブザープにもより多角的な視点で臨むことができるようになると期待される。

今回の「プロセス・オブザープ」という仕組みは、おそらく国際交流基金としても初めての試みだと思われる。このチャレンジ自体は素晴らしい試みと高く評価したい。上述した提案を踏まえて、より改善することにより、この仕組みが継続することを祈念する。